

小学唱歌に関する研究—唐沢富太郎の唱歌歌詞分析について—

A Study on Shoka in Elementary School
- Analysis of Shoka Lyrics by Tomitaro Karasawa

飯泉祐美子(帝京科学大学)

Yumiko IIZUMI(Teikyo University of Science)

(キーワード)

唱歌 歌詞分析

1.はじめに

1872年の学制発布により、学校で「唱歌」を教授することが掲げられた。しかし、それまでのわが国における「歌」は、大半が口承伝承であったため、子どもたちが、学校で歌い学ぶことのできる歌や、その教授法は存在しなかった。そのため、「当分之ヲ欠ク」と、但し書きが添えられ、実際には取り扱われなかった。

その後、1875年、伊澤修二が、アメリカで、ルーサー・ホワイティング・メーソンの下で音楽を学び、このことが大きなきっかけとなり、1879年に帰国した伊澤は、翌年来日したルーサー・ホワイティング・メーソンとともに、子どもに与え教授するための「学校唱歌」の創作と普及に努めることとなった。

この「学校唱歌」が本発表で使用する我が国最初の『小学唱歌集』である。『小学唱歌集』は、初篇33曲(1881)、第二篇16曲(1883)、第三篇42曲(1884)の全91曲である。

2.唐沢富太郎について

唐沢富太郎は、1911年新潟で生まれの教育史学者である。唐沢は、『教科書の歴史』第三章「儒教主義復活時代の教科書」において全曲を歌詞の内容で分類した。以下がその項目である。

1. 自然、生活、行事に関するもの
 - ・ 自然 34 曲

- ・ 生活行事 5 曲

2. 君が代を祝うもの 忠君愛国的なもの

- ・ 君が代を祝うもの 21 曲
- ・ 忠君愛国 5 曲

3. 教訓的なもの

- ・ 父母 6 曲
- ・ 勉学・勤勉 11 曲
- ・ 人倫・人生 9 曲

3.唐沢の分類について

唐沢は、全91曲を歌詞の内容で分類したと言っているが、以下のような根拠が曖昧なものがある。

「第十七 蝶々」

「さかゆる御代に」という歌詞があるため「君が代を祝うもの」に分類

「第八十三 さけ花よ」

「にごらぬ御代に」という歌詞があるにもかかわらず「自然」に分類

そこで、KHコードによるテキストマイニングにより、言葉そのものの関係性などを探り、『小学唱歌集』初篇、第二篇、第三篇、全91曲の分類を試みる。

4. KH Coder による整理と分類

全91曲の歌詞内の名詞に着目し、その出現頻度や、KH Coderを用い、共起ネットワークを

作成し、相関関係をみる。

以下の8項目の整理・分類を行った。

- ① 初篇楽曲の複数出現する語(名詞)について
- ② 第二篇楽曲の複数出現する語(名詞)について
- ③ 第三篇楽曲の複数出現する語(名詞)について
- ④ 初篇楽曲の共起ネットワーク
- ⑤ 第二篇楽曲の共起ネットワーク
- ⑥ 第三篇楽曲の共起ネットワーク(その1)(その2)
- ⑦ 全91曲の共起ネットワーク(その1)(その2)
- ⑧⑦に唐沢分類を overlap

5.結果と考察

〈複数出現する語(名詞)について〉

初篇、第二篇、第三篇、いずれも最も多く出現していた語は「花」であった。特に、第三篇では他の言葉と比較すると群を抜いての出現頻度となっている。

初篇では「民」「國」「御代」等、国家プロジェクトを感じさせる言葉は、4回の出現はあるが、圧倒的に他の自然や生活にかかわる名詞が多く出現している。

第二篇でも、初篇と同様に「花」がトップであるが、初篇と大きく異なるのは、それに続く言葉が「君が代」であることである。しかし、こちらも全体的には、自然に関わるものが多くを占めている。

第三篇でも、「花」の出現がトップであるが、「人」「こころ」「忠臣」「書」「恩」「母」「御代」と、明治14年の初篇、明治16年の第二篇とは異なる。これは、『小学唱歌集』の教科書として以外の、もう一つの使命、「人々が声をそろえて歌うこと」による先進列強国に対峙するために国家をあげたプロジェクト歌う国民の育成(思想教育)に傾倒していたことが顕著に表れた

からではないかと考える。

〈共起ネットワークについて〉

初篇では、第7曲、第10曲、第12曲、第14曲、第15曲、第26曲は歌詞同士の重なりも見られ、内容的に近い関係であるように見えるが、残りの楽曲の歌詞内容の類似する点があったとしても大きく影響し合うことなく、1曲1曲が単独で歌詞を構成していることが多い。

第二篇では、初篇と比べるとそれぞれの楽曲がより独立し、それぞれが単体で存在していることが、視覚で判断できる。楽曲間の歌詞の関係性は、要となっている出現頻度の高い種類の限定された歌詞によって繋がる部分もあるが、一曲一曲の歌詞の個性が生かされているのではと考える。

第三篇では、初篇、第二篇、と楽曲に個性化の傾向があったものが、一転して、全体的に言葉の結びつきが強くなり、その1の共起ネットワーク図では重なりが多すぎてしまったため、見にくいものとなってしまった。そのため歌詞を絞り込み、図を描きなおしたが、やはり個性化の傾向はほぼなくなっている。

〈唐沢分類と overlap させた共起ネットワーク〉

唐沢は7つに分類しているが、共起ネットワークに重ね合わせると、「生活・行事」「忠君愛国」「父・母」「人倫・人生」は楽曲同士が近い位置関係に位置しているが、「自然」「君が代を祝うもの」「勉学・勤勉」は、楽曲同士は散らばっており、歌詞の内容の距離感が遠い。

つまり、唐沢分類は KHCoder による分類では、読み取りにくく、なぜ唐沢がこのような分類をしたのか疑問が残る。

これは、唐沢の根拠のない曖昧さや、わかりにくさがあると片づけてよいものなのであろうか?『小学唱歌集』が日本という国民国家形成のために大切な役目を果たしていたことを示そうという思惑があったからではなかろうか。唐沢の分類の思いは次回の課題とする。